

用語集

001：遺跡と史跡

遺 跡 いせき

- ・過去に人々が活動し、その痕跡が使用したモノ、構築物の跡などとして残されている場所。周辺の自然環境を遺跡に含むこともある。
- ・貝塚や古墳のように、現在も地表にその痕跡が残り目にできるもののほか、地下に埋蔵されているものもあり、「埋蔵文化財包蔵地」とも呼ばれる。現在把握されている埋蔵文化財包蔵地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」とされ、文化財保護法によって開発等の際には届出を行う必要がある地域となっている。

史 跡 しせき

- ・文化財保護法で示された文化財の種別である記念物のうち、貝塚、古墳、都城跡などの遺跡で、特に歴史上又は学術的価値の高いものの保存を図るため、文化財保護法に基づき指定されたものを「史跡」、その中でも特に重要なものを「特別史跡」とする。これにより現状の改変などが制限され、保存に必要な管理、保存の措置が講じられる。

002：遺構と遺物

遺 構 いこう

- ・過去の人類活動の痕跡を何らかの形で示しているもののうち不動産的なもの。過去の建築物、墓や道路などの構築物のほか、水田や畑の跡など生産にかかわった場所、モノが廃棄された場所など様々ある。

遺 物 いぶつ

- ・過去の人類活動の痕跡を何らかの形で示しているものの中で不動産ではないもの。土器や石器のような人工遺物のほか、廃棄された獣骨や木材などの自然遺物もある。



下野谷遺跡 遺物出土状況（東集落）



下野谷遺跡 遺構検出状況（東集落）

003：土坑とピット どこうとぴっと

- ・一般に地表面を掘りくぼめた一定の容積を有する円形・楕円形・方形あるいは長方形などの平面形を呈する穴を土坑という。用途は様々で中には墓とみなされるものもある。より小型のものをピットと呼び区別している。

004：竪穴住居（建物） たてあなじゅうきょ（たてもの）

- ・地面を掘りくぼめ、その底面を平らにして床をつくり、その上に屋根をかけた構造を持つ住居（建物）。床面には、炉・カマド・柱穴などがあり、床面は固く踏み固められている。周囲に「周溝」と呼ばれる溝がめぐるものも多い。
- ・縄文時代中期の関東地方では円形のものが多いが、下野谷遺跡では直径が4、5mのものが多いが、中には10mを超える大型のものもある。上部構造は不明な点も多く、復元住居の作成では、草葺、樹皮葺、土葺など様々なものが見られる。



下野谷遺跡 東集落検出竪穴住居（建物）写真中央は炉

005：掘立柱建物 ほったてばしらたてもの

- ・木造建築物の一つ。柱を直接土坑内にさし入れて建てるもので、通常床は掘りくぼめられていない。柱穴は一定の間隔で直線的に配置される。縄文時代のものでは、柱は4本や6本のものが多い。
- ・床が地面につく平地式なのか高床式なのかなど上部構造その用途などを含め不明な部分が多い。



下野谷遺跡で検出された掘立柱建物跡

006：環状集落 かんじょうしゅうらく

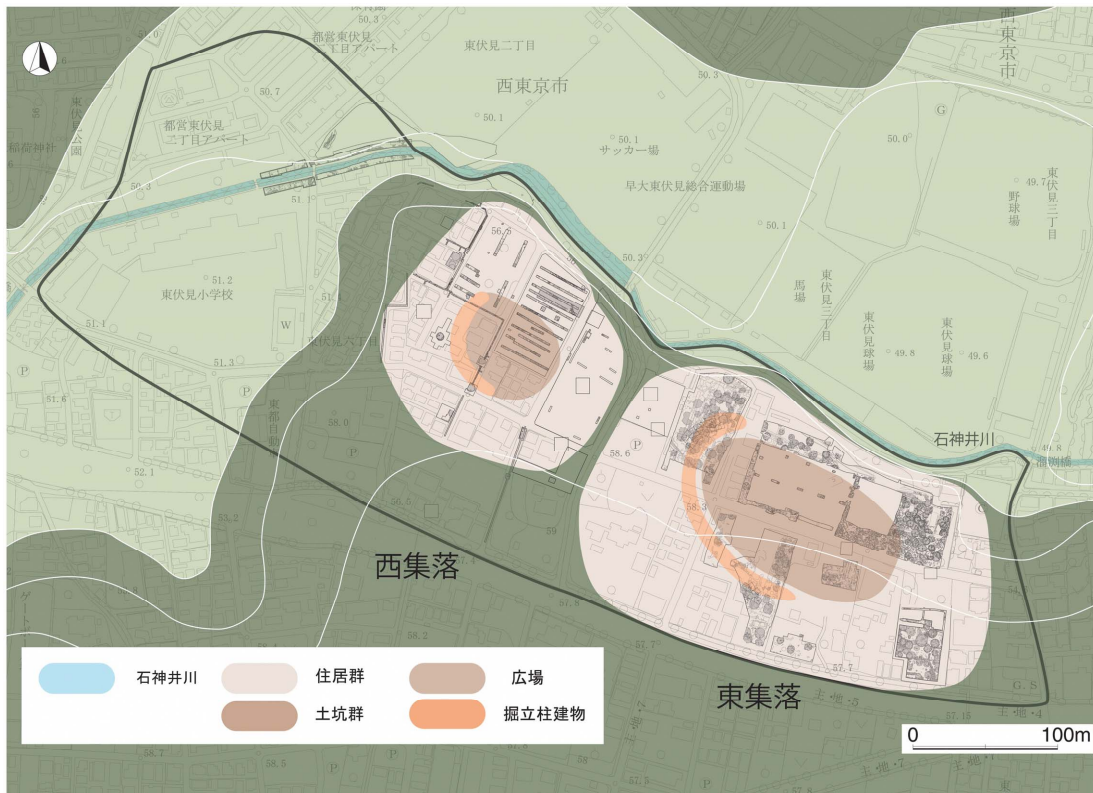
- ・縄文時代にみられる集落形態で、住居跡が環状あるいは馬蹄形に分布する。東日本において、縄文時代中期の大規模遺跡には多くみられる傾向があり、中期末葉には消滅する。
- ・下野谷遺跡では、中央に広場と集団墓地を設け、その周りに竪穴住居や掘立柱建物を配置している。
- ・縄文時代の集落構造に起因されたものと解釈する一方、居住が繰り返行われた時間的な累積の結果、環状の形態を形成するという説もある。
- ・中河川に沿って分布する集落群の中に、下野谷遺跡のような集落規模が大きく長期間継続する集落があり、地域の核となる「拠点集落」として位置付けられる。



史跡下野谷遺跡 環状集落（西集落）

007：双環状集落 そうかんじょうしゅうらく

- ・環状集落が近接して2つ以上あると考えられる環状集落。地域の拠点となる大集落に多くみられる構造。集落の同時存在性など、不明な点も多い。



史跡下野谷遺跡 双環状集落

008：遺存 いぞん

- ・現在まで残っていること。

009：縄文時代 じょうもんじだい

- ・日本列島における考古学による時代区分の一時代。旧石器時代に後続し、弥生時代に先行する。地質学的には更新世に当たり、世界史的には新石器時代に位置づけられる。
- ・縄文土器を用いた時代。1万6000年前から2000年前までの1万年間以上が相当し、定住的な集落の形成と多種多様な食糧採集に特徴があり、狩猟、漁猟、採集を基本的な生業とする。

010：縄文時代時期区分 じょうもんじだいきくぶん

- ・縄文時代は土器の出現によって旧石器時代と画され、稲作農耕の具体的な証拠である水田の出現によって弥生時代と画される。
 - ・縄文時代は縄文土器編年によって6期（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）に区分される。
 - ・縄文土器（縄文時代）の時期区分
 - 草創期：約16,000年前～（ただし、縄文文化的な型式の変遷が定着するのは草創期後半から）
 - 早期：約11,000年前～
 - 前期：約7,200年前～
 - 中期：約5,500年前～
 - 後期：約4,700年前～
 - 晩期：約3,400年前～（ただし、晩期から弥生時代への移行の様相は地域により相当に異なる）
- 上記の年代は、放射性炭素年代測定値を校正した暦年代観に従っている。



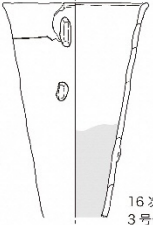





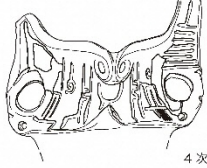
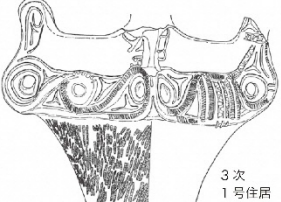
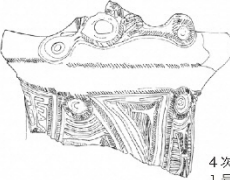
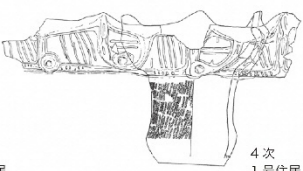
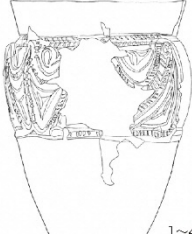
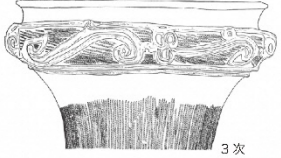

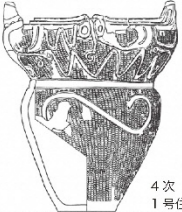
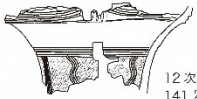

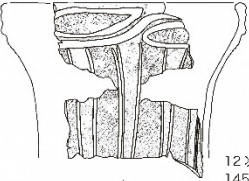




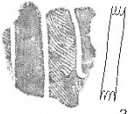
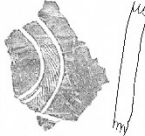
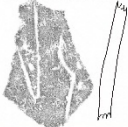
011：年代測定 ねんだいそくてい

- ・遺物に付着した炭などの炭素14という元素を用いた「放射性炭素年代測定」が多く用いられる。得られた数値を、他の分析法で得られた数値を用いて暦の年代に変換することを「年代（暦年）校正」といい、変換された年代を「校正年代」「暦年代」という。

012：土器型式と編年 ときけいしきとへんねん

- ・遺跡から出土した遺物の形や文様から一定の特徴を抽出したまとまりを「型式」といい、その型式が把握された遺跡名を冠した「型式名」（「勝坂式」や「加曽利E式」など）がつけられる。遺物の出土する層位や出土状況から遺物の新旧関係が定まり、地域ごとの併行関係から、地域と時期の物差しとなる「編年」が組まれる。編年は、011にあるような年代測定が年代の値を出す絶対年代を示すのに対し、比較による相対年代を示す。

西集落の主な土器編年表

五領ヶ台早期	 14次 15号トレンチ	 14次 14号トレンチ		
勝坂1式期	 16次 3号住居	 3次 1号住居 阿玉台1b	 14次 阿玉台1b	
勝坂2式期	 1~4次	 16次 3号住居	 16次 3号住居	 4次
勝坂3式期	 3次 1号住居	 4次 1号住居	 4次 1号住居	 1~4次
加曾利E1式期	 3次 1号住居	 1~4次	 4次 1号住居	
加曾利E2式期	 12次 141号住居	 4次 4号住居 連弧文		
加曾利E3式期	 12次 145号住居	 1~4次 曾利4 加曾利E3		
加曾利E4式期	 1~4次	 1~4次	 14次 1号トレンチ西側	
称名寺I式期	 2次	 2次		
称名寺II式期	 2次			

013：埋甕 まいよう（うめがめ）

- ・縄文時代に竪穴住居の入口床面部分に土器を埋めた施設のことをさす。住居の炉に土器を埋設したものを「埋甕炉」と呼ぶ場合もあり、そこに使用された土器のことをさす場合もある。この土器が個々の住居の年代の根拠になることが多い。

014：縄文時代の石器 じょうもんじだいのせっき

石 皿 いしざら

- ・磨石とセットで用いられる、堅果類の実などをすりつぶすため道具。

石 斧 せきふ

- ・打ち欠いて作る打製石斧と磨いて作る磨製石斧がある。前者の中には、土堀具として使われたと考えられているものが多く含まれる。後者は、樹木の伐採等に用いられた斧と考えられている。

石 匙 せっぴ

- ・つまみ部分のついた刃器。

015：縄文時代中期以外の遺構 じょうもんじだいちゅうきいがいのいこう

礫 群 れきぐん

- ・旧石器時代の遺構で、焼けた礫が集積したもの。石蒸し料理などに使われたものではないかと考えられている。下野谷遺跡の旧石器時代の地層からも多く検出されている。

地下式墳 ちかしきこう

- ・竪穴で横に広い空間を持つ施設。古代、中世の葬送の習俗に関わると考えられるものと貯蔵のための地下室であった可能性があるものがある。
- ・下柳沢遺跡では葬送のためと考えられるもの 40 基以上が検出されている。

016：自然化学分析 しぜんかがくぶんせき

花粉分析 かふんぶんせき

- ・堆積物から検出される花粉を分析し、古植生や環境の復元を行う分析方法。

圧痕分析 あっこんぶんせき

- ・土器に混入している植物や昆虫などの痕跡をシリコンなどで型どった後、顕微鏡で観察同定する分析方法。有機物が残りにくい遺跡には有効な分析方法で、下野谷遺跡でも、ダイズやエゴマなどが見つかっている。

- ・総合博物館に対し、地域資料を主な対象とする。地域に所蔵する資料の保存と活用を基本とするとともに、より開かれた参加と体験を志向する博物館のあり方。地域文化の創造の拠点として、文化財や歴史資料を守り、有効に活用する場であるとともに、地域住民の学びの場として、地域の豊かさを育む役割が期待されている。
- ・本計画では、主に、下野谷遺跡周辺に必要と考えられる下野谷遺跡のガイダンス機能を有するものでありつつ、市域の他の文化財を総合的に扱うものとして、地域の資料を収集、研究、展示しながら、地域活動の拠点となるような施設を想定している。